

武蔵野日曜集会

狭き門

――ルカ伝第13章22～30節――

1959年5月24日

小池辰雄

救わるる者は少なきか 戦つて狭い門から入れ 何処の者なるかを知らず 神さまの鏡に映される 己自身との戦い 音を観る キリスト道 砕心・砕身 十字架の恩寵 キリストが言い残している言葉 日々是れ好日 神の愛の結晶 父の御意をおこなう者のみ 終始一環

【ルカ13・22～30】

22 イエス教えつつ町々村々を過ぎて、エルサレムに旅し給うとき、²³或人^{あるひと}いう『主よ、救わるる者は少なきか』²⁴ イエス人々に言いたもう『力を尽くして狭き門より入れ。我なんじらに告ぐ、入らん事を求めて入り能わぬ者おからん。²⁵家主^{いえあるじ}おきて門を閉じたる後、なんじら外に立ちて「主よ我らに開き給え」と言いつつ門を叩き始めんに、主人^{あるじ}こたえて「われ汝ら^{いずこ}が何処の者なるかを知らず」と言わん。²⁶その時「われらは御前^{のまへ}にて飲食^{のみくい}し、なんじは我らの町の大路^{おおじ}にて教え給えり」と言い出でんに、²⁷主人^{あるじ}こたえて「われ汝ら^{いずこ}が何処の者なるかを知らず、悪をなす者どもよ、皆われを離れ去れ」と言わん。²⁸汝らアブラハム、イサク、ヤコブ及び凡^{すべ}ての預言者の、神の国に居り、己らの逐い出さるるを見ば、其^{そこ}処^{ところ}にて哀哭^{なげき}・切齒^{はがみ}する事あらん。²⁹また人々、東より西より南より北より来りて、神の国の宴に就^つくべし。³⁰視よ、後なる者の先になり、先なる者の後になる事あらん』

●救わるる者は少なきか

「狭き門」という題をつけました。これはマタイ伝とルカ伝の共通の記事でして、いわゆる旧資料、「イエスの語録」というルカとマタイに共通の資料のものです。マルコ伝とヨハネ伝にはありません。多分これは前にまだ一度もやらなかったところだと思えます。ルカ伝9章51節から19章27節まではいわゆるイエスのガリラヤからエルサレムへの途上の記事です。多分これはヨルダン川の東のペレヤの岸の方に少し渡つてこられた頃の途すがらであらうといったような想像をしています。まあ、どこでもいいです。

²² イエス教えつつ町々村々を過ぎて、エルサレムに旅し給うとき、²³或人^{あるひと}いう『主よ、救わるる者は少なきか』



とにかく、かなり方々の町々村々を通つてはお話をしておられたらしい。十字架にかか
るエルサレムへの途です。群衆はおおいにエルサレムでキリストが王座にでも付いて新王
国でもできるくらいに思つてたかも知れませんが、とんでもない話です。

「主よ、救わるる者は少なきか」

と聞いた。

マタイ伝では、7章13、14節に、

「¹³狭き門より入れ、滅^{ほろび}にいたる門は大きく、その路は^{みち}広く、之より入る者お
おし。¹⁴生命にいたる門は狭く、その路は細く、之を見出すもの少なし。」(マ
タイ7・13～14)

とある。それからマタイ伝25章10節から12節はあの「十人の処女」の話のところ、

「¹⁰彼ら買わんとて往きたる間に^{まはなむし}新郎きたりたれば、備えおりし者どもは彼と
ともに婚筵にいり、而して門は閉ざされたり。¹¹その後かの他の^{おとめ}処女ども来
りて「主よ、主よ、われらの為にひらき給え」と言いしに、¹²答えて「まこ
とに汝らに告ぐ、我は汝らを知らず」と言えり。」(マタイ25・10～12)

と。また、7章の22、23節に、

「²²その日おおくの者、われに^{むか}対して「主よ主よ、我らは汝の名によりて預言し、
汝の名によりて悪鬼を逐いだし、汝の名によりて多くの^{ちから}能力ある業を為し
しにあらずや」と言わん。²³その時われ^{あらわ}明白に告げん「われ断えて汝らを知
らず、不法をなす者よ、我を離れされ」と。」(マタイ7・22～23)

マタイ伝では少し散らばつていて、ルカ伝の方がまとまっているわけです。また、マ
タイ8章11、12節に、

「¹¹又なんじらに告ぐ、多くの人、東より西より来り、アブラハム、イサク、
ヤコブとともに天国の宴につき、¹²御国の子らは外の^{くらき}暗に逐い出され、そこ
にて^{なげき}哀哭・^{はがみ}齒嚙することあらん」(マタイ8・11～12)

という。そういうようにマタイ伝では散っておりますが、大体ルカ伝と同じ資料からきて
いるんだらうと学者は分類するわけです。

では、ルカ伝の今の本文に従つていきます。

²³或人^{あるひと}いう『主よ、救わるる者は少なきか』

と。信仰の問題を、「救わるる者は少なきか」という問い方は正しいか正しくないか。よく、
「神さまはいますか。聖書はどういうことが書いてあるか。こういうことはどうい
う意味ですか」と問う。

「救われる者が少ないか、多いか」

という聞き方は、それ自体は悪くはない。悪くはないけれども、それは対象的な三人称的



な問いです。

「自分は一体救われるか救われないか」

という問題ではなくして、

「もう天国もだいぶ、神の国も近づいてきたようですが、救われる者はどれくらいでしょうか」

といった問いは少し閑問答です。いわゆる学問の、いわゆる神学のような角度の、いわゆる聖書註解というような角度の、そういった問いの気持です。

●戦って狭い門から入れ

この福音書を読んでいて、いつも問答に気をつけないといかん。キリストがそれに一体どういように答えられるか。大体、キリストはまともに答えないんです。まともに答えないということは、彼らの問い方が実はゆがんでいる。イエスの答えの方が実はまともなんです。イエスの答えが実は真正面の答えで、彼らの聞きかたは横になって斜めに聞いている。斜めの角度で聞いているが、イエスはまともに答える。私はとかく斜めの方を見て話をして申し訳ありませんが。キリストはまともに答えられまして、聞く方が斜めなんです。キリストはいつもまともに答える。ところが、聞く方が斜めである。

「主よ、救われる者は少なきか」

と。そうしたら、イエスは何と答えられたかというと、多いか少ないかということは先に出不さない。

24 イエス人々に言いたもう『力を尽くして狭き門より入れ。』

「多いも少ないもそれはまあいいよ。お前さんは力を尽くして狭き門から入りなさい」

と。問題は、自分のことをそっちのけで、多いも少ないもありはしない。

「多くても少なくてもいいから、とにかくお前さんは力を尽くして狭き門から入れ」

と、大上段からキリストは、

「力を尽くして狭き門から入れ」

と言われました。

この「力を尽くして」というギリシア語は「アゴニゾマイ」という言葉で、その命令形ですが、「競え」という字です。競え戦えということ、戦って狭き門から入るように戦い取れというような意味です。戦いとる。要するに、「力を尽くして」で結構ですけれども、もう少し強く訳せば、

「戦って狭い門から入れ」

ということ。近頃は入学試験がまさにこの「狭き門」で、文字通り狭き門でみんな競争して戦ってます。



「福音は、これを得んとて追求する。我既に得たりと思わず、これを得んとて追い求む」

とピリピ書にあつたでしょ。マラソン競争の、走る人に例えて言ってます。あれも戦いの方です。ピリピ書3章12節から、

「¹²われ既に取れり、既に全うせられたりと言うにあらず、唯これを捉えんとて追求む。キリストは之を得させんとて我を捉えたまえり。¹³兄弟よ、われは既に捉えたりと思わず、唯この一事を務む、即ち後のものを忘れ、前のものに向いて励み、¹⁴標準を指して進み、神のキリスト・イエスに由りて上に召したもう召にかかわる褒美を得んとて之を追求む。」(ピリピ3・12～14)

原語はちよつと違いますけれども、やはり非常に烈しく追求する字です。

それが「力を尽くして狭き門より入れ」ということです。入学試験が非常に難関であることは決してほめた話ではない。ゆがんだ勉強をして入っていくようなことでなくて、はやくもつと勉強らしい勉強ができるようにならなくてはいいかと思ひますけれども、とにかく事実狭き門です。天国も狭い門であるから、それを戦いとらなくてはいいかんという。

●何処の者なるかを知らず

我なんじらに告ぐ、入らん事を求めて入り能わぬ者おおからん。

求めているけれども、入れない者も多いだろうと。

²⁵家主おきて門を閉じたる後、なんじら外に立ちて「主よ我らに開き給え」

と言いつつ門を叩き始めんに、主人こたえて「われ汝らは何処の者なるかを

知らず」と言わん。

どこの者だか知らないと言つた時に、

²⁶その時「われらは御前にて飲食し、なんじは我らの町の大路にて教え給えり」

と言ひ出でんに、

「私たちは御前で一緒に飲み食いをいたしました。よく知つてらつしやるはずです。

あなたは私たちの町で教えてくださった。私たちもそれを聞いて、顔なじみですよ」

と言つてみたところで、

²⁷主人こたえて「われ汝らは何処の者なるかを知らず、悪をなす者どもよ、

皆われを離れ去れ」と言わん。

と、この烈しい言葉を発するだろうと言う。これはもちろん、イエスが一緒にご飯をいただき、またイエスのお話を何度も聞いている人たちがいくらでもいる。にもかかわらず、彼らは本当の意味において自分を受けとつていないということをつらつら思われて、キリストはある意味において伝道の失敗を失望してもおられたと思ひます。本当の意味において一つも受けとつてくれない。もういいのかと思つたら、やれやれまだそんなことかとい



うようなことです。それは確かにそのキリストの気持がここに反映しています。むしろ非常な嘆きとまた怒りすらも入っているかと思われます。

そういうようなわけだから、いい加減なことで天国に入れるものではない。力を尽くして、戦いとして、そして狭き門から入らなくてはいいかん。入れる者が多い少ないの問題ではない。一人びとりの、一人びとりが入れるか入れないかの問題だ。入れるなんて思ったら大間違いだ、というわけです。

「われ汝らが何処の者なるかを知らず」

ではなく、本当は知っている。主人はちゃんと知っているんだけど、それはただこの世的に知っているだけの話です。向こうがこの世的に自分を知っているだけで、本当に自分を心から知っているのではない。だから、そんなものは知っていても知らないのと同じことだ、赤の他人と同じことだと言って、退けているような言葉です。

●神さまの鏡に映される

「私のお父さんは、私の祖先はこうである。だから、私も入れる」

なんて思ったら、それは間違い。問題は各人の絶対的な問題であって、親兄弟また祖先にどういう立派な人がいようが、そんなことでもって資格がくるわけではない。世の中はイモヅルやヒモとかコネとかいろいろなものズルズルいつているようですけど、天国はそんなヒモはない。天国の世界にはヒモだのツルだのというものはない。この世にはたくさんヒモやツルがあつて、情実がある。日本なんてのはおおいにそうかも知れません。それでいろんな党派ができてみたり、何とかかんとかと。芸術の世界でも御存知のとおりなことです。いろんな余計なものはたらいしています。

けれども天国の世界はそうじゃない。この世の世界でも最後はそうじゃない。最後は時がこれを審くということは、やはり本ものは本ものとして現れるときがくる。偽りものは偽りものとして現れるときがくる。どんなに世の中は不公平にみえましても、まだ世界歴史で本当のものが隠れ、本当でないものが覆われていることもいくつもあるでしょうけれども、だんだんそれは明らかにされる。また、ついにそのことが知れずに終わっても、この最後の世界では、神の国には全部、地上のものは反映しています。全部、天界に映してある。人の目に映る写真以上に天界には、神さまの鏡にはちゃんと、どんな写真よりか素晴らしく映っている。写真は外側の真を伝えるけれども、神さまの世界は内側の真を伝える。

「人はその上^{うわ}辺を見るが、神はその内を見る」

と、キリストの言葉にあるとおりです。即ち、内側の真相を映すところの光がくる。だから、詩篇19篇にも、

「誰か御前に耐え得んや。その隠れたる罪より我を赦したまえ」

というような言葉がある。19篇に限らない。詩篇の中にはたくさんそういう祈りがある。



「誰か御前に立つことを得んや」

と、詩篇130篇にもある。そういうように、ちゃんと映っています。ですから、私たちは祈りの世界ではいつも神の前に平伏しです。神の前に平伏したところに祈りは本当の展開を始める。そこをごまかしていたら、祈りは本当の展開にならない。神との交わりは本ものにならない。しかし、神さまは、神の前に自分をさらけだす人は、それはどんなことがあっても、キリストの十字架のゆえにこれをすべて赦し、そして、

「心配はいらん。だからこそ、私はキリストを救いのためにお前に渡した」と言われる。

●己自身との戦い

こないだ、私の関係している学校の学生が自殺をした。何か悩み苦しみがあったようです。私は学校で福音の話を教材に使っているが、学生はやはり、聞いているんだけど、本当に聞いてやしない。

「そんな苦しみ悩みがあるなら、なぜ、私に言ってくれませんか。私はひとを審く人でもないし、審く資格もない。審くのではなくて、一緒にその悩みを考えてそれを突破してあげようというわけだから、君たち、何か問題があったら、遠慮なしに私のところに来てくれ。私は一緒に突破してあげようと思うから」と言ってあげました。

そういうようなわけで、問題は自分の縁故者が、ツルやコネがどうかではない。また、ただ

「何回お話を聞きました、一緒に何度ご飯を食べました」

ではない。一緒にご飯を食べ、一緒にお話を聞いたならば、それが本当にしみこんでいくては。私たちがこうやって一緒に集会しているのもそうです。本当にお互いが結ばれるところは、聖書の真理、キリストの生命、キリストの光において互いにキリストの光をご馳走としているのだから。キリストの言葉を本当に聞いているならば、こういうような、

「それでもこうでありました」

なんていう答をするような人にはなくなるわけです。外側から聞いたり、外側で一緒であるような人は、ただそういった上辺の資格でもっていいと思っている。それでは本当に「力を尽くして」はいない。

「競争する」という言葉は私はあまり好きではない。それは人を押しつけることだから。キリストもここで何も「ひとを押しつけて」と仰っているわけではない。誰でも力を尽くす人は、誰でもこの場合に戦う人は――誰と戦うかという、自己と戦う――この世界では、人と戦っているのではない。福音の世界は人を押しつける世界ではない。競争というと、普通の競争は人を押し退けて、一等賞だけでも。この戦いは、



「あの人がどう、この人がどう、私の信仰の方がひとつ上だ、私の霊的賜物の方が上だ」

なんてやっているような比較研究の戦いではない。この戦いはどこまでも、神さまと我との絶対的な関係におけるところの己自身との戦いです。

「己にうち勝つ者は城を取るよりもなお勇者である」

という。これは箴言の中にもそれと同じような言葉がありました。

「己を攻むるよりも城を攻むるはやすし」

という。そういう己との戦いです。もうひとつ言えば、己に働くところのサタンとの戦いと言ってもいいでしょう。自己を捕らえるところのサタンとの戦いです。

要するに、己との戦いというのは、己に作用する一切のものに対する、神を妨げる一切のものに対する戦いです。人を押し退けるのではない。これは全然、戦いの質がちがう、競争の質がちがう。己を天国に入れないとするサタンのいろんな勢力の、誘惑の、そういったものに対する戦いです。そして、それは一体どこにいるかということ、この自己の中にくらでも巢をつくっている。

●音を観る

「観音^{かんのん}」というのは観世音、音を観^みると書く。音は、普通は聞くものです。キリストが、

「聞く耳あるものは聞くべし」

と。キリストの言う、言葉を聞く耳とは、読む目とは何か。我々はこうやって読むと、発音が出てきて、

「力を尽くして狭き門より入れ」

と、その通りよくわかる。「力を尽くして狭き門より入れ」ということはみんな一応わかる。それは聞いている。ところが、「力を尽くして狭き門より入れ」という、この言葉が発しているところの音の奥の世界は現実なんです。その言葉が発している音が表しているところの現実を観るかどうか。それを観る世界です。それを観る人は本当にそういう現実の中に今いなければ観えない。その現実の中に入っていくと観える。その現実の中に入っていないことには観えない。

「人新たに生まれずば聖国を見ることができない」

とキリストが言われた。ダンテも『神曲』の後ろの方で観る世界というものを非常に高くおいている。観るということとはただ肉眼で見ることではない。心眼をもつて見ることです。心眼をもつて見るためには、その自分というものがその世界に入っていないなければ見えない。私たちもこの空間に入っているから、ここにバラがあるということが見える。余計なことを言いだしましたが、しかし、観音ということは大事なことです。

「観音経」の中に、「一心即十界」という言葉がある。「心を尽くして戦いとる」ためには、



全心が一心に——一心不乱という言葉がある。一つのことを心にして乱れずという——私たちはさんざん聞いている言葉で、

「なんだそんなことか」

ということなんです。けれども、「そんなことか」と言っているようなことではない。「十界」とは、仏教の世界でいいますと、

「地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界、人間界、天界、声聞界、縁覚界、菩薩界、
仏界」

のことです。人間というものはこの十界を自分のうちにも持っているという。地獄から仏界までその可能性があるというわけだ。今全部持っているというわけでもなからうと思えますけれども、持つ可能性がある。それで、十の指がこれを表しているという。祈るときに合掌して祈る。即ち、十界を渾然一つにして——もちろん、祈るときにはそれを仏界に統一するような気持で、最高の世界に統一する気持で合掌して祈るという——いろんなものが混然としているが、これを一つにして、善きものをもってこれを全部統一してしまうという心地らしい。我々は罪びとでいろいろなしようながないものが——パウロもたくさん

のリストをあげてますが——そういう「地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界、人間界、天界、声聞界、縁覚界、菩薩界、仏界」というこの十界が即ち一心に帰せられてしまう。それがこの合掌の心地だという。観音経の方の本にそう書いてある。

恵心僧都（源信）という坊さんがある。

「夏衣ひとえに西を思ふかな裏なき弥陀を頼む身なれば」

「西」というのは極楽のことです。夏衣は単ひとえでしよ。裏がない。それは「一心に」ということを「ひとえ」にかけるわけです。ひとえに天国を思ふかなと同じこと。「裏なき」というのは、ひとえですから、裏も表もありはしない。

「裏なき弥陀を頼む身なれば」

とは、

「ただ一つなるキリストを頼む身なれば」

と、私たちならそういうわけです。これ「一念一向」という。

こういう話がある。三悟という人と久作という男がいました。三悟というのは神仏両刀使いで、諸々の神またいろいろな仏さんを拜んでいる。そしていろんなお札ふだを持って身につけていた。守り札をたくさんお札のよろいみたいにして。ところが、久作というのは、ただ観音さまのお札一つをもっていた。ただ観音経一念です。二人で旅をしていたら、山賊がでてきて、二人に因縁をつけて斬りかかってきた。一目散に逃げたが、二人とも太刀を受けてしまった。やっと逃げおおせたところで、どれくらい傷をうけたかと恐る恐る、太刀を受けたところを見たところ、三悟の方はそんなにお札をもっていたんだが、お札とお札の隙間に刀の傷を受けていた。ところが、久作の方はただ一つの観音さんのお札に太刀



が当たって、彼は無傷であつたという。

●キリスト道

それから言つても、心の分裂がいかに信仰の世界で禁物であるかということです。キリストは、

「二主に仕えることはできない」

と言われたとおり、私たちもただ主イエス・キリストだけです。私は仏教の話をしたり、いろんなことをしますけれども、それは仏さんに仕えるということではないので、仏さんの世界でそのようなものであるから、いよいよ我々はただ一人の主イエス・キリストに一念一向で、即ち一心即十界ということです。これが即ち、

「心を尽くして、力を尽くして、思いを尽くして、主たる汝の神を愛すべし」

という、「尽くして、尽くして」と言われたゆえんはそこにある。宗教の世界は違ひましても、その心のもちかたは一つです。それが本当の、ここでもって「戦いとれ」という意味であつて、決して、いわゆるこの世的な競争を言っているのではない。

この「狭き門」というのはどういう門であるか。マタイ伝7章のところを開いても結構です。

「天国に至る道は細く、門は狭い」

という。普通、

「どうも、キリスト教は考えが狭いから、信仰にはいると狭くなるから、私は聖書のことをちよつと適当に知ることはいいけれども、その先はごめんだ。もつと自由で幅が知りたい」

というような考えが大体多いですよ。けれども、ヨハネ伝14章6節には、

「5トマス言う『主よ、何処にゆき給うかを知らず、争でその道^{いずこ}を知らんや』」

6 イエス彼に言い給う『われは道なり、真理^{まこと}なり、生命^{いのち}なり、我に由らでは

誰^{みもと}にても父の御許にいたる者なし。』（マタイ14・5～6）

とある。悟りの世界は仏教でいけますよ。だけれども、このキリストが「父」と言われるところの、

「宇宙を創造したまいしところの天界のただ唯一者である父なる神、この父なる神

への道は、キリストだけがその道だ」

ということです。吉田口や御殿場口やいろいろな道があつて行き着くかたは同じ富士の頂上、というわけにはいかない。

このキリストという道は狭き門なんです。キリストという道は即ち十字架道、という道です。十字架道であるが、それは各人にとっては十字架路である。各々の足で歩く路^{みち}。十字架の路です。路は、私たち一人びとりが歩かせられる路というものは、絶対に他の人たちがう。みんなそれぞれ別々な路を歩いている。我々の人生航路はみんな私たち一人びとり



どれも決して一つではない。

「私は小池先生と同じ路を歩きました」

なんて言ったって、それはダメです。路はみんな違う。みんな違うけれども、その路は質においてはキリストの道であるかぎり、その路は質においてはみな道である。みなキリスト道です。言い換えれば、わが路をキリスト道として歩くんです。その意味において、皆さんと共通で同質です。我々はそれぞれの路を同じくキリスト道として歩く。その意味において同じ道を歩きます。同質の道、しかしながら、具体的にはみなそれぞれの路です。

これはもうこの道でもそうなんです。N君とS君は、絵の表現はそれぞれ大いに違うけれども、キリストの生命をここに盛らんとすることにおいて一つである。A君兄弟は、政治の方でやっていこうという。それぞれ兄弟で違うけれども、しかし、それはやはりキリストの道を政治に活用していくという志において一つである。何をするにしてもみな私たちはどんなに違ったことをしていても、その意味においてはキリスト道です。

● 碎心・碎身

そのキリスト道たるや十字架の道であつて、これは狭いんです。先ず、その道に入る門はいずこにあるか。「狭き門」という。キリストはヨハネ伝10章9節で、

「⁹我は門なり、おおよそ我によりて入る者は救われ、かつ出入をなし、草を得べし。¹⁰盗人のきたるは盗み、殺し、亡き^{きた}んとするの他なし。わが来るは

羊に生命を得しめ、かつ豊かに得しめん為なり。」(ヨハネ10・9～10)

と。この門を入っていくと、その先の牧場は実に豊かな草のある牧場であると、ちゃんとキリストは言っておられる。

門は狭い。「私は門だ」「狭き門」と言われたから、

「我は門なり」

という門は狭いに決まっています。何か持ち物を持って歩いたら、それは入れないくらい狭い。裸一貫で入っていかなければこの門は入れない。

「私はこれだけ聖書の知識があります」

と言って、この門に入ろうとしたって、これは入れない。

「これだけ聖書を勉強しました」

と言って入ろうとしたって、入れない。

「私はこれだけ善いことをしました」

と言って、この門を入ろうと思っても、それは門に入る資格にならない。善きことをしようが、聖書をどんなに勉強して知つていようが、この狭き門は入れない。狭き門は、無手で来なさい、何もいらんと。

「私はかくかくである」



という自己紹介はいらん。

「無手で来なさい。無資格、無手で何もいらん、手離しで来なさい」

という。狭き門に入るただ一つの条件は何かというと、何も携えないで入るということです。これができない人がありますかね。

「何かもって来い。もう少し聖書を勉強してこい」

と、この世の学校ならそうですよ。たくさん勉強して、うんと知らなければ、なかなか大学なんてところに簡単に入れない。けれども、天国の大学への門は万人可能の門です。これは何にもいらない。この

「何もものも携えず」

というのが今度は逆にむずかしい。きつと何か携えて行きたくなってしまふ。キリストは喜ぶだろうと思つてね。

ところが、キリストが喜ぶ携えものは何かというと、これは砕けた心だけです。砕けた心だけは、これだけは携えて来なくては。砕け心、砕けた身体で行くわけです。砕け心、砕身だな。だから、体当たりなんです。この狭き門にそろそろ入るのではなくて、狭き門に体当たりして、何も携えず無手でもって体当たりして、砕けた心でぶつ倒れると、この狭き門が入れる。

●十字架の恩寵

キリストは神さまの世界にそのようにして入ったひとです。本当に自分を明け渡し、本当に自分を投げ出し、神に

「ただあなたの御意のみ」

と言って、自分そのものをお土産にしたんです。己そのものをお土産にしたので、何かお土産を持って行つたのではない。自分という存在そのものを神さまへのお土産にして持っていました。

「我とわが身をお土産に持つ」

とでも言うかな。我と我が身を土産に持つて行く。「献身」だとか何とかいう、そういう熟語はもう聞き飽きているから嫌ですよ。言つたつていいけれどもき、お土産の方がよく分かる。我と我が身をお土産にして、その砕け心で体当たりしていくときに、

「そうだ、お前はお前自身全部を私に明け渡して来たか。それでは、お前を通して私は限りなきことをするぞ」

というのが、この狭き門に入つてくる態勢に対する神・キリストからの声です。これが「力を尽くして」とここで言っているところの意味です。

「己自身に戦つてこい」

というのは、

「己自身を棄ててかかつてこい」



ということです。これはなかなかできませんが、いくらできなくてもいい。いくらできなくてもいいから、その気合が大事なんです。どんなに惨憺たる我でかまわない。あるがままを投身してかかるときに――何もお体裁はいらん――あるがままを投身してかかってくるときに、そういうようにして求めてくれば、その時に十字架を仰ぐならば、かくしてその気合で十字架を仰ぐならば、自分を棄てようとする悲願が実は、十字架において

「自分が棄てられてある」

という事実に基づくわけです。その悲願をもたなかったらダメですよ、ただ十字架を見たつて。悲願を持たないでただ十字架を見て、

「ああそうですか」

では、それは気休め信仰です。観念や気休めでないのはやはり、自分がそのような悲願を起すことです。「求めよ」というこの「求め」というのはそのことです。「叩けよ」というのはそのことです。「尋ねよ」というのがそのことです。

「キリストを求めよ、叩けよ、尋ねよ。門を体当たりして叩けよ」

と。そのような分裂なきところに自分は行けない。けれども、いくら行けなくなつてかわん。その悲願を起こして十字架を見るときに、この十字架にその悲願は実は成就されている。その悲願は聞きとげられてあつた。

「十字架が即ちこの悲願を聞きとげていくべきだった。あそこに、この棄てようとしている私が棄てられてありました、自己に勝とうとしている私は勝たれてありました」

というのがこの十字架の恩寵です。だから、

「その願いのあるところは必ず聞かれている」

というのはそのことです。聞かれてあるんだもの。聞かれてある。

「十字架においてちゃんと聞かれてある。汝の己を立てる罪はすっかり解放されてある」

という、キリストは事実をもつて我々に迫ってくるわけです。だから、ぶつ倒れてみたら、いや実にぶつ倒れているのは、キリストが私たちをぶつ倒してくださつて、あの十字架上に、すっかりもう軽くしてくださつた。そうしたら、もうこの狭き門、十字架という狭き門は、180度回転されて開いてある。

「さあ、来なさい。何も心配はいらん。『それでもまだ私は』なんていうような汝

だからこそ、入つて来なさい」

というんです、十字架は。「だから入つて来なさい」と。

●キリストが言い残している言葉

皆さん、この声を聞いて、この声を観なければ。観たならば、今の瞬間に観たならば、



豁然として我はその十字架の門の向こう側に置かれていたということに気がつく。今、現にあなた方はこの場において本当に入っているはずです。入っていないならば、まだその悲願は足りない。まだその十字架を観る観かたが足りない。この事実の前に、

「何人が入れますか」

ではなかった。

「汝は即ち己を投げ捨てて入って来なさい。必ず入れてやるから」

とキリストが仰る。必ず入れてやると。

「力を尽くして狭き門より入れ。私が必ず入れてやる」

と、あとは書いてないけれども、事実をもつてキリストはみなあとから裏付ける。これが私たちが御言を聞く、

「聞く耳ある者は聞くべし」

というその聞き方はそこにあるんです。キリストが言い残している言葉なんです。言い残している言葉はみな、キリストは事実をもつて言い残してある。事実をもつて実証するから、キリストはそこを言わない。イエスは事実をもつて語っている。その事実を聞かないで、ただキリストの言葉だけを聞いたつて、これはいくら聖書を読んだつてダメですよ。事実は言葉を支えているんだから、聖書は。

「初めに言あり。言は神と共にあり」

という、その「初めに言あり」というのはある意味において非常に躓きです。ゲートが

「初めに行為あり」

と言った。私はその点ですがにゲートは偉いと思う。ゲートはどれほどの気持で言ったかは知りませんが。初めに神さまは行為があつた。事実をもつて裏付けられた行為、言行一如のことがらである。プロテスタントの信仰はどうしても、こここのところに私たちの聖書のつかみ方の使命があるんです。

私たちの実存はどうだか知らん。けれども、私たちの悲願はここにかかっているから、私たちは事実どんなに小さな現象でありましても、本当の力が来ている。そうでしょ。確信ならざる確信がきているでしょ。雨が降ったつて何だつて、みんな集会にやつて来るでしょ。

「今日は雨が降ったから、行くのはちよつとよそう」

なんて、それは力を尽くして狭き門から入ろうとしていないんだ。今日来なかった人たちは、どうもこのルカ伝13章でキリストからやられてしまう。

●日々是れ好日

これは余談だけれども、こういうお話がある。

「露^{すいじ}垂^い語^ごして云く、「十五日^{いげん}己^い前は汝^にに問^いわず、十五日^{いご}己^い後は一句^いを道^{みち}い將^もち来^きたれ」。

自^みら代^ずつて云く、「日々^{いちにち}是^これ好^{こう}日^{にち}」。



碧巖録の第六則のところに出てくる言葉です。雲門という坊さんがお弟子さんたちに、一か月のまん中の日に、十五日以前のこと、即ち今まで過ぎた二週間のことはお前たちに聞かない。それがどのような歩き方をしたか、幸福であつたか災いであつたか、どうであつたかなんていうことは聞かない。さて、十五日以後は一句を言い持ちきたれと。これからあとの半月のことについて、お前たちは何かそのことを言ってみよと。

お婆さんがいまして、そのお婆さんに息子が二人いて、一人は傘屋を、もう一人は下駄屋をやっていた。雨が降ると、下駄屋は下駄が売れない。天気になると傘屋の傘が売れない。雨が降っても晴れても、お婆さんは悲しんでいる。それはことの半面を見ていれば、毎日悲しまざるをえないですね。あつちの子どもは困っているだろう、こつちの子どもは困っているだろうと、天気と雨で変わっていくのだから。そうでなくて反対に、ああ今日はあつちが喜んでいるだろう、今日はこつちが喜んでいるだろうと毎日を喜ばいいのに、そのマイナスの方だけ考えている。このお婆さんの気持はものの暗い面だけを見ている。実は、明るい面が逆にあるのに、明るいところを見ない。

人間の毎日毎日のいろんなことはいろいろ出てくるが、それは本当に心がこれをもってつかまえていくならば、どの日もよからざるはなしということですよ。

「十五日あとのことも、これから後も毎日毎日がまことに結構な日でございますよ」と答えれば、この坊さんは喜んだ。誰も答えられない。

「日々是れ好日と答えろ」

と応えた。この言葉は、

「二日の労苦は一日にて足れり」

と、キリストが言われた言葉よりかむしろもうひとつ強いかも知れない。

「日々是好日」

という。どの日もどの日も主にありて、キリストにありて好からざるはなし。どのようなことがふりかかってきても結構でござるよと。

そこに神の愛を、もうひとつ奥に神のゆえを、神の大なるゆえを観るか。神の大なる愛を見ていくならば、キリストの愛は、神の愛は千変万化して現れてくる。決して、「神は愛なり」という観念ではない。

「神は愛なり」

とは、具体的に一日一日が即ち千変万化の愛であるということです。その他に説明しようがない。「神は愛なり」とどんなに書きましても、概念的な説明をしたってそれはダメです。私たちは、「神は愛なり」とは日々これを受けとって味わっていく。そこに神の愛を、病気になるって倒れましても、

「然り、アーメン」

と言って、その中に神の恩寵を受けとっていく。病氣即感謝ではありませんけれども、何



がきましても、そこに神の愛をみて、更に進んで行くならば、神さまは善きようにそれを展開してくださる。そこが即ち信であり、それが本当に神を愛することです。「神を愛する」ということと、「神を信ずる」ということは一つです。神を愛することがなくて、信ずるという信、その信仰は苦しくてしょうがない。私はそうです。そういった何か方程式のみたいな信仰はごめんだ。

「雨が降つても、雲のかなたに太陽は今もなお照っている」

という。雨の日もなお陽は照っているぞ、陽の光はきているぞというように、神の愛をどのような現実においても受けとつていくのが信です。

「愛は一切に勝つ」

とは、そのような愛を受けとる者は本当に勝つていくということです。

●神の愛の結晶

「狭き門」とは実にキリストの十字架という神の愛の結晶したところの十字架という門です。十字架とは、神の愛の結晶ではないですか。私たちがキリストを十字架にかけたその罪は何とも申し訳ないが、その罪をひっくり返して、その罪の行為をひっくり返して、神さまの愛が凝集しているのが、

「我なんじらのために生命を棄つる」

という、これが即ちこの「狭き門」です。この神の愛が凝集している狭き門、一番神の愛が焦点して燃えているところの白熱の十字架の門を、

「何ものよりもこれ有難し」

と言って入っていかないで、どこから入りますか。何を持って行きますか。私たちが持つていく何ものがありますか、この神さまの十字架の愛が凝集しているところの狭き門にぶつかつたら。もう何にも顧みることはありはしない。この神さまの愛にただ全身が投げ捨てられてしまう。投げ捨てられてしまうという受け身になってしまふ。そうしたらその先は、

「豊かなる草を汝らに与える。豊かなるキリストの生命を与える」

とヨハネ伝10章に書いてある。

だから今度は、自己との戦いはどこかへいつてしまった。神の愛という、十字架という驚くべき愛の門にぶつかつたら、戦いがもう戦いではなくなつてしまった。「己に克つ」なんて言つたつて、勝ちやしない。勝たんと欲する悲願は大事だけれども、どうせ勝てやしないんだ。その悲願はどこで受けとられていくかという、この十字架だから、

「ああ、ここに行きましよう」

と言って入っていけば、そこから本当の勝利が始まる。躓いても転んでも倒れてもなお決して負けないところの、どんなに負けても必ず勝つていくところの、そういう勝利の歩みが始まる。クリスチャンとはそのような、本当の意味において最後の敗北を知らざる者です。



皆さん、クリスチャンであることは、驚くべき主の勇者とされたことです。男も女も老いたるも若きも同じこと。その点においてはもはや、この福音の世界に匹敵すべきところはない。キリスト一念でいきなさい。そういう張りのあるクリスチャンにならなかったら、もうやめたらいいですよ、信仰なんか。

ルカ伝の16章に、この世の子らの方が不義なる富を得てどうのこうのという、光の子らよりも巧みなりと言って、この世の子らをキリストが誉めた難しい譬話がある。この世の子らはこの世のことについて一生懸命だから、なかなか悪巧みを働かせる。

●父の御意をおこなう者のみ

そういうようにして、私たちは狭き門から入れられました。その先は無限に広いところの素晴らしい世界である。そのような入り方をしないで、

「やれ聞いたの、やれご飯を一緒に食べたの」

なんてやっていたのでは、

「お前たちはどこの者だか知らん」

と言われる。なお恐ろしい言葉は、あのマタイ伝7章の終りの方にあります。同じような並行記事としてマタイ伝の方で考えられる言葉ですが。

「²²その日おおくの者、われに^{むか}対して「主よ主よ、我らは汝の名によりて預言し、汝の名によりて悪鬼を逐いだし、汝の名によりて多くの能力^{ちから}ある業を為ししにあらずや」と言わん。²³その時われ明白^{あらわ}に告げん「われ断えて汝らを知らず、不法をなす者よ、我を離れされ」と。」(マタイ7・22～23)

キリストの名を借りてもいろいろな現象が起きる。宗教の世界は、一念凝れば現象は起きますよ、対象は何でも。「鰯^{いわし}の頭も信心」なんていう。一念凝れば現象は起きます。けれども、この一念のその心根が大事なんです、質が。そのことはキリストがはっきりその前に言っている。

「²¹我^{むか}に対して主よ主よという者、ことごとくは天国に入らず、ただ天にいま

す我が父の御意をおこなう者のみ、之に入るべし。」(マタイ7・21)

と。御意が立てられていない。神さまの聖意が立てられていない――聖意聖愛とでもいいますか――聖なる意志、聖なる神の愛が立てられていないで、これが私されている事態ならば、どんなにそれが宗教的にいわゆる霊的でありましても、これは福音の世界ではない。宗教の世界であっても、それはこの福音の世界ではない。御利益宗教ではあっても、福音ではない。ここに私たちの最も大事な角度が必要なわけです。だから、

「そういうものは断えて知らずと言わん」

とキリストは言われる。

キリストの十字架における神の恩寵、罪の赦し。キリストの復活におけるところの神の



栄光の現れるところの生命。神の御名の讃えられるところの、神の御意の行われるところの
の實力、これを受けとつていくのではないものは、どんなにそれが宗教的でありましても、
また現象的には類似いたしましても、「断えて知らず」です。本当の聖国ではない。

²⁸ 汝らアブラハム、イサク、ヤコブ及び凡ての預言者の、神の国に居り、己
らの逐い出さるるを見れば、其処にて哀哭・切齒する事あらん。

「私の祖先にはアブラハムがいました。どうのこうの」

といくら言いましても、それはダメだよと。

「我々はこれこれのことを御名によりてしました」

と言いましても、それだけのことでは分らん。だから、誰が天国に入るかは、人の品定
めはできない。私たちはただ畏れかしこみて、この御意を行ずるところに自らを置いていく。

「誰が入りますか。誰が天国で上ですか」

なんていう問答をしているところがある。

「しもべ
僕となる者だ」

とキリストは言われた。イエス・キリストが即ち一番どん底となつたんです。

●終始一環

²⁹ また人々、東より西より南より北より来りて、神の国の宴に就くべし。

東西南北から神の国につく者は、お前たちの思いもよらない人たちが入ってくるぞと。
その中には仏教徒もいるかも知れません。全然、宗教のことを知らない人がいるかも知れ
ません。片一方は神学者が落つこちるかも知れません。神さまの世界は誰か知らんや。誰
が天国に入るかは誰か知らんや。それはもう、神さまの国というのは実にいろんな種々雑
多な方々がたくさんいるに相違ない。

「私は何年教会に通いましたから」

ということが資格にもならない。

「聖書についてこれだけのことを書きましたから」

なんてことも資格になりはしない。問題は、神さまは本当にその人の全存在をもって判断
なさることだから、人には分かん。だから、

³⁰ 視よ、後なる者の先になり、先なる者の後になる事あらん

という。「後」という字は「エスカトス」という字で、「最後のもの」です。最後の人たちが
先に第一等賞的な人になる。第一等的な人たちがまたビリッカスの人たちになると、逆な
ことが書いてある。この世の判断と、価値判断が違ってしまふ。「あの人は」と思う人がど
つこいそうでない。「こんな人が」と思う人が入っている、というようなわけでしょう。また、

「どうも私は惨憺たるものです。いよいよしんがりです。とうとう天国の門に私は
遅れました」



と思って、刀折れ矢尽きてぶっ倒れている人が、どっこいそこは天国の中だったなんていうようなことになる。分かりますよ。

私は「終末的実存」なんていうことをよく言うけれども、私こそこのしんがりです。しんがりの人が先になると書いてあるからね、それでまた気をゆるしていると、本当のしんがりになってしまう（笑）。私はまたある時には、

「私は最後に天国に入りたい。皆さん、どうか先に行ってください。私はしんがりに入りますから」

と言う。これも真理です。この天国へのマラソン競争というのは、いわゆる押し退けて入ろうなんて思わない。私みたいなろまは、ビリッカスをうけたまわって行きます。けれども、それはどうしたって入れていただきたいわけです。多分、私なんかは一番遅く、もうちょっとで門が閉じる時に滑り込みくらいなところでしょうけれども。それでも、滑り込みでも、とにかく入れられるという確信が私たちはもてるはずです。

「どうも、天国に入れるかどうか」

なんていうのでは、信仰の生活に力がない。必ず入れます。キリストの恩寵を受けとるかぎり必ず入れます。信仰の確かさだとか何かいろんな論文を書くけれども、こっち側の信仰の確かさなんてありませんよ。不確かでしょうがない。

キリストの信愛が確かだから、キリストの十字架の贖いが、復活の聖霊の御助けが確かだから、私は確かに救われる。あなた方一人ひとりが確かに救われる。その確かということとを私して安んじたら、確かでなくなる。その安んじは私された安んじではない。そこはもう説明ができない。

そういうようなわけで、後なるものが先になり、先だと思っていた者たちが実は思い上がりでもって後になってしまふ。とにかく、しんがりのなねばりと担いをもって行きなさい。そのことと、さつき言った

「力を尽くして狭き門より入れ」

ということとは決して矛盾しない。それが、

「我は始めにして終りなり」

という言葉に通ずるかも知れません。

「我はアルファにしてオメガなり」

と。私たちはキリストにあつてアルファであり、またオメガである。先にしてまた終り、終りにしてまた先なるもの、終始一環というわけだ。始めとお終いが終始一環。先に入るも、後に入るも一環になってしまふ。この中には信仰の先輩と後輩がいます。しかし、原始のこの福音の中に入っている皆さんは終始一環です。先も後もありはしない。秩序はありますよ。秩序はありますけれども、質においては終始一環ということです。では、今日はそこまでとします。

